

[翻刻]

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(九)

——太識冠——

Kowaka Ongyokubon at the Hosa Bunko Library, Nagoya City, No.9

—Taishokukan—

服 部 幸 造

Kozo HATTORI

Studies in Humanities and Cultures

No. 7

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 7号

2007年6月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

JUNE 2007

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(九)

—太識冠—

服部 幸造

(承) 翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(二) —夜討曾我・信田・十番切・大臣— (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第9号 二〇〇〇年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(二) —兵庫・はま出・清重・俊寛・新曲・やしま— (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第10号 二〇〇一年三月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(三) —安宅・一満箱王・景清— (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第11号 二〇〇一年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(四) —未来記・腰越・鞍馬出・馬揃・高館— (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第12号 二〇〇二年三月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(五) —伏見常繁・小袖乞・しつか— (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第13号 二〇〇二年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(六) —元服曾我・

人間文化研究 7 二〇〇七年

入鹿・日本記・笛の巻・文学— (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第15号 二〇〇三年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(七) —四国落・常繁問答・烏帽子折・正尊— (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第17号 二〇〇四年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(八) —敦盛・鎌田・わた・笈さかし— (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第20号 二〇〇六年三月)

(太識冠)

夫我朝と申すは天津こやねのみことの。天の岩戸をおしひらき。照日の光もろともに。春日の宮とあらはれて国家を守り給ふなり。されはにや春日をはるの日と書事は。夏の日は極熱す。秋の日はみじかし。冬の日はさむけし。春の日はのとけくし能万物を生長す四季に殊更すぐれ。名日成により春の日と書奉つて春日と名付申也。彼宮の氏は藤原氏にておはします。藤原の其中に太織冠と申すは鎌足の臣の御事なり。始はもんせうじやうにて(1才)

御座有けるか。入鹿の臣をたいらげ。太織冠になされさせ給ふそも此官と申は。上代にためしなし。扱末代に有かたし。目出度官途なりけり。これによつて此きみをふひとつとも申。いつも鎌を持給へはかまたり臣とも申す。春日の宮に参籠あつて。あまたの願を立させ給ふ其中に。興福寺のこんだうを。最所に建立有へしとて。しやうごんし

つほうをちりばめ。しやこんたうをたてさせ給ふに果報は天よりもあまくたり。国のなびきしたがふ事。ふる雨の国土をうるをし。たゞさうようの(一ウ)

風になびくかごとし。公達あまたおはします。ちやくによをは光明光后と名付奉りて。聖武天王の後に立せ給ふ。次女にあたり給ふを。こうはくによと名付て。三国一の美人たり。「サシ」然にかの姫君の。ゆふにやさしき御形たとへをとるにためしなし。かつらのまゆは青うして遠山に匂ふ霞に似。「フシ同」百のこびあるまなききは。せきやうの。霧の間に。弓はり月のいる風情。ひすひのかんざしは。黒うして長ければ柳の糸を。春風のけづるふぜひにことならず。「コトハ」姿は三十二相にして情は天下にならびなし(2才)

かゝるゆふなる御形の異国までも聞えあり。七帝の惣王。太宗皇帝はつたへ聞き召れて。「サシイロ」みぬ恋にあくかれ。雲の上も。かき曇り月の友もをのづから光りを失ひ給ひけり。「コトハ」臣下けいしやう一どうに。そうし申されけるやうは。玉躰の御ふぜひをは。よのつねならず拝み申して候。何をかつゝませ給ふへき。しちん中へせんじあれと。奏し申されたりければ。「サシイロ」みかといふんまし／＼てあら恥しや。つゝむにたえぬ花のかの。もれても人のさとりけるか。今は何をかつゝむへきはより東海敷(2ウ)

千里。日本ならの都にすむ。太織冠か乙姫をかせの。「フシ同」便にきくからに。見ぬ面影の。立そひて忘れもやらでいかゝせん。「コトハ」ちしんたちうけたまはり。是は目出度御所望かな所詮は。勅使を

たてゝ。輪言にて。むかへとらせ給ひ。えいらんあれとのせんぎにて。うんかと申兵者をちよくしに立させ給ふ。うんかすでに太宗の。きん札給はり。数千里の海路を過。日本ならの都につき。たいしよくわん(への)みもとにててうさつをさゝぐ。太織冠御らんして。我は是日域とて。小国の王の臣下とし。いかにと(3才)

して異国の。大王をさふなく聳にとるへきと。「カ、ルツメ同」一度は勅使をじたひある。ちよくし立もとつて。此旨を奏聞す。太宗いとゝあくかれて。二度の勅使を立させ給ふ。聖武皇帝聞給ひ。情は上下によるへからず小国の臣下の子なりとも。其はゞかりは有へからず。まるへんてうを出すとて。忝も皇帝の。印判をなされければちよくし面目ほどこして。急き立もとつて。返てうをさゝぐれば。太宗大きにえいりよあり。吉日ゑらび早々に。むかひ舟をそこされける。今度の迎の勅使(3ウ)

には。橘の朝臣に右大臣法眼なりそも本朝と申は。小国成とは申せ共。智恵第一の国なり。みれんの出立叶ふましけつこうあれとのせんきに。むねとの大船三百艘。後の御舟をは。龍頭鷁首と名付て。しゆたんをもつてかたどり。へには鸚鵡の頭をまなひともに孔雀の尾をたれたり。舟の上に錦をしき。ちんだんをまじへ。くわうようらんけいみかきたて。玉の幡は風になひき金の瓦は日に光り。ぐぜいのふねとも云つへし。はつひ天くわん玉をたれ。身をかざつたる(4才)

女官じちよ。三百人すぐつて。是は船中の御かいしやくの為にとて。かざり舟にぞのせられたりける日域より唐土まで。数千里の海上の。

御椀^メの為に。おんがの舞有へしとて。児百人すぐつて。身をかさつてぞのせられたるすでに弥生の末つかた。とも綱といておし出す。あまの川瀬にあらね共妻こし舟の帆を上たり。かくて波風しつかにて。舟は本朝津の国や。なんばの浦に着しかは。勅使はならの京につく。太織官はうけ取て。ひとつは異国の聞えと云。又ひとつは本朝の(4ウ)

いくわふの為そと思召し山海の珍果を山とつみ。五千人の上下を。其年の八月半より。明る卯月初迄もてなし給ふ太織官。果報の程ぞめてたき (「コトハ」) 卯月も漸々末に成行ければ。吉日を多らんで玉の御輿に召れ。難波の浦まで御出有。それよりもりやうどうげきしうにめされ。舟は程なく大唐の明州の湊につかせ給ふ。内裏に聞し召れて。すはやこくものぎやうけいよ。いざ／＼御迎にまいらんとて。左り右の大臣。女官所百官けいじやう。官人仕丁にいたるまで(5オ)

残る所はまします。抑太国の国の数を申に一千四百四十国。郡の数を申に。九万八千余郡。寺の数を申に壹万式千六ヶ寺。市の数を申に壹万二千八百。ちやうあんの市と申は。在家の数は百万家。人の数を申に。五十九億十万人立市なり。道の数を申に。長安城よりも十の道分てり。けんろけんなん道とはたつみをさして行道。廿六にふみわけり。おくなんだうと申はいぬゐへ行道。三十五にふみわけり。かうぼくだうは北をさして行道末はたゝ二つ (「サシイロ」) とうやうだうは舟(5ウ)

路にて末は。日本につゞけり (「コトハ」) 懸る道々よりも御調物をそ

なへ。后を拝み奉る。あら目出度や只一目拝み申人までも。ひんくをのかれたちまちふつきのいゑとなる。されはにや皇帝も。なれ近付せたまへは (「サシ」) 諸病を諭したちまちに。養性の大臣にあへる心地して。ごぢの間世すなをに。民のかまどもゆたかなり (「コトハ」) かくて過行給ひけるに。後の宮思しめす。我小国の者と有なから。太国の后にそなはりたる。其後名を日本に。残してこそと思召し。御父太織官。興福寺の(6オ)

こんだう。おなしき釈迦のれいぎうを。御建立有へきに。かの御堂のせにうに。仏具法具ををくつて末代の形見ともなさはやと思召し (「ツメ同」) そろへ給ふたからには先。くわげんけいしひんせき。くわけんけいと申は。打ならしての其後に。こゑさらになりやまずとゝめんと思ふ時には。九でうのけさをおうなり。しひん石は硯。彼硯のとくゆふは。水なくして墨をすつて心のまゝにつかふなり。ぼんほんの法花経をたらようにてあなん尊者のあそばしたり。七しやうるりの水か・ね。しやくせんだんのけいたい。べい(6ウ)

るりの花たて。せんだんのけうそく。にくだんじゆのじゆず一れん。くわうこのとらのかわ。こんじきの獅子のかわ。くわうそのかわ三枚かゝる宝の其中に。しやくせんだんのみそぎにて。五寸の釈迦をつくり立。肉色の御舍利をこしんに作りこめなから方。八寸の水晶の塔の中に納て。むげ宝珠と名付て。是を一の重宝にして送り文を別紙に書石の箱に納て。をくらせ給ひけるとかや。此玉は則。興福寺の本尊。釈迦仏のみけんに。えりはめ給ふへきなりと書こそ送りましたまひけれ

(7才)

「コトハ」扱そもかゝる重宝を。誰かはしゆごし送るへき。器量の仁をえらめとて。兵者を召るゝにかうぼくだうのすゑ雲州と云国に。満戸將軍うんそうとて。大剛の兵者あり。おとらぬ程の兵者を。三百人相そへて。「サシイロ」都を立て太唐の、明州の、湊より。「フシ同」一葉の舟に棹をさし。追手の風に。帆をあげて。数千万里を送りけり。「コトハ」去間海底に住給ふ。八代龍王の惣王玉の日本に渡る事を。神通にてしろしめし。もろくの龍王達を集て仰けるは

「サシ」我等はすでに(7ウ)

海底の竜王たりといへとも。五すい三ねつは隙もなしおつこうにも相かたき。「コトハ」しやくせんだんのみそぎにて五寸の釈迦のれいぶつ。波の上をお通りある。いざくのうばひとつて。我等正覚成へし。尤然るへしとて。八大龍王の。波風あらく立ければ。舟へうとうじちさんし。浪路も閑ならざりき。去共きどくふしぎの。仏のめしたる御舟なれば。「サシ」上界の天人は雲を凌ぎ。仏法守護の夜叉羅刹は。浪風をしつめさせ給ひ。舟に子細はなくしてみつばのそやをいのごとく。殊更追手(8才)

とぞ成にける。「コトハ」龍王いとゝいかりをなし。浪風にてとゞめずは。おさへてうばひ取へし。さあらん程に異国の者も。定てこはくふせくへし。竜王のけんぞくに。しゆらはたけき兵者なれば。たのふでみんなとの給ひてあしゆら達をぞ召れける。彼修羅共の太将まけいしゆら。もろくのけんぞくを。引ぐしてこそ参れ。本よりこのむと

うちやうなれば。百千にやつかんのけんぞくを。異形異類に出立せ。鉾たうちやうを取持せ。かたきは数万騎候とも。軍は家の物なれば。玉をいては。うばひとりて(8ウ)

参らすへしと申て。「カ、ルフシ」日本と唐土の塩さかひ。ちくらか沖に陣を取満戸か。舟を待にけり。「コトハ」是をは知らずまんこは。順風に帆をあげ心にまかせ吹れゆくに。日比有へしとも覚ぬ所に嶋ひとつうかべり。見れば幡あしひるかへし。くろかねの楯の相よりも。劔や鉾のいな光り。刀杖の影共か。雲霞のこたく見えければ。あれは何と云たる子細そや。いかなる事の有へきと。心もとなく思ひけれ共。さあらぬ躰にてふかせ行。彼修羅共の太将まけいしゆら。一陣にすゝみ出。天をひゝかす大をん(9才)

にて。唯今爰に。せきをすゑたる兵者をいか成者と思ふそ。かいりうい・のけんぞくにしゆらといへるものなり。しいしゆをいかんとおほすらん。御舟に御座ある。しやくせんだんのみそぎにて。五寸の釈迦のれいぶつ。よのたからはほしからず。其水晶の玉。通す事有ましきそ。速に渡され候らへさあらずは一人も通すまじいと申す。まんこ此よし聞よりも。舟のへいたにつつ立あかり。あらこととしのいきおいや。扱は音に承るあしゆらたちにてましますよな。わが大国のならひにて。百人か大将を百こ(9ウ)

と名付官人といひ。千人か大将を千こと名付受領といひ。万人か大将を満こと名付將軍と是を云。かひくはなけれ共。壱万人か太将なれば。満戸將軍うんそうとは某か事にて候。尤龍宮よりの御所望に

随て。水晶の玉参らせたくは候らへとも七帝の中よりも。器量の仁と
ゑらまれ。日本の勅使を給る時の日よりも。いのちをは我が君の。恩
の為に奉る。去はめいのかろき事は。此儀による事なれば。命のあら
んするかぎりは。玉にをいてはとらるましいぞ。実玉かほしくは

〔ツメ〕まんこを討てとれ（10才）

やとてから／＼とそ笑ひける。修羅共此よしを聞よりも。さらは手な
みをみせんとて。鉄杖らんばの劔をひつさげうんかのことく責かゝる。
まんこ是をみて。叶ふへき様あらざれば。舟そこにつつと入て。装束
をそきたりけるまんこが其日のしやうぞくに。じんづうゆけのうでが
ねさはんにやつかんのすねあてし。妙法蓮花のつなぬきはき。にんに
くじひの鎧を。草摺長にきくだして。あぬくたら三みやく三ぼだひの
五枚甲をいくびにき。忍ひの緒をそしめにける。かうまりけんの大刀。
まん十文字にさいたり（10ウ）

けり。大たうれんと云劔を。あしお長にむすんでさげ。けんみやうれ
んといふほこもつて。舟のへいたにつつ立あがる三百余人の兵者共。
思ひ／＼に出立て。はし舟をろしおしうかべすでにかけんとしたりけ
り。たうの軍のならひにてみだんにかゝる事はなし。調子をとつてが
くをうつて拍子に合かけひく。勢揃のたいこは。らんじよ／＼しよつ
てうし。かけよとうつたいこは。さそ／＼とうつなり。ひけよとうつ
太鼓は。おつてうこつと打なりしゆらたうじんの戦は昔も今もためし
なし其上しゆらかたゝかひにくわ（11才）

えんの雨をふらし。悪風を吹とばせ。磐石をふらす事は雪の花のちる

ごとし劔をとばせ鉾をなげ。どくの矢を放す事はまなごをまくがごと
し。身をかくさんと思ふ時。けしの中へ分て入あらはれんと思ふ時。
須弥にもたけをくらぶべし。かゝる神通めいよを。まのまへにげんじ。
爰をせんどゝたゝかへは。すではや唐人心はたけくいさめど。此い
きをいにをされて。のかれかたくそ見えにける。〔コトハ〕去間満戸
はみかたを下知し申けるは。とても叶はぬ事ならば。しゆらが太将四
五人。そのみくつとなしてこそ。異国の（11ウ）

聞えはよかるへけれ。我もと思はん人々は。最後の供をしてたべと。
金剛戒の幔多羅。胎藏戒のまんだら。両戒諸尊一千式百余尊のまんだ
らを。ほろにかけて吹そらし。舟底よりも馬共を引出す。まんこが秘
藏の名馬には。神通羣毛と名付て。七寸八分明六歳を髪はあくまであ
つうして。おつさまむかふよこはたばり。〔カ、ルツメ〕尾口惣胴つ
まねのくさり。しゝあひ骨なみよめのふしは作り付たることくなり。
らつてんの鞍を置織香の錦のうはしきに。こんごんぬつたるりの（12
才）

鑑かじゆの力皮をは狸々の血にて染たりけり同じきおもがひかけさせ。
金の轡がんにとかませ。錦のたづなよつてかけ。満戸ゆらりと打乗て。
波にしづまぬうきぐつを。四の足にかけたれば。波の上をはしる事は
平路をつたふことくなり。三百余人の兵者共。何も馬にのつたれと
皆々うきぐつかけたれば。雲井に鷹の飛やうに。一村がりにぎつとち
らししゆらが陣へきつて入。修羅共是を見て。一疋二疋のみならず。
三百疋の馬共か。いづれも浪をはしる事はふしき成とそ肝をけし。か

程に(12ウ)

いさむしゆら共も。にけ眼にそ成たりける。太将のあしゆら。すゝみ
 出て云けるはあふ爰さうぞ兼てより。申せし事のちがはぬなふ。めだ
 れがほのすくやかし。おもてかほくせ。めにすみたていらんあらそひ
 あらがふきにはにまじき事にて候そや。手をくだかではいかにとして
 かう・やう・ふかくが見えはこそ。一合戦せんとて。いでたつたりし有
 様は。悪業心意の鎧をき。むし・やう・けんこの甲の緒をしめとうじやう
 むさんのほこつて。しんにぐちの幡さゝせ。百千やつかんのけんぞ
 く共を相したがへ。しきりにときを(13オ)

つくれば。へき天やぶれ。はしやうに落海底をうごかし波をあげ。こ
 くうさなからどうよふして。月の光りもうづもれてひとへにぢやうや
 となつたりけり。此程音に承る。満戸將軍うんそうに見参せんと云
 まゝに。まんこを中に取籠る。まんこが兵者。ことの事ともせざりけ
 り。爰をせんどゝきつたりけり。らごあしゆら三百人からこんだあし
 ゆら五百人。手をくだいてぞきつたりける。まんこはめいよの馬のり
 海の上にて乗手綱。さうかいふとりうばい。のりうかへたる馬の足。
 弓手(13ウ)

の者をつくとき。わうぎやうの手綱きつと引。めてのものをつく時。
 飛行の鞭をちやうとうつ。にぐる者を追時には。ぜんでうあをりのぶ
 ちをよくしつだいにのつたりけり。西から東へ。きつて通る時には。
 三百余人が跡につき爰をせんどゝ切たりけり。入かへ〜たゝかへは。
 修羅が軍はこれかゝつて叶ふへしとも見えざりけり。惣太将のまけ

いしゆら。八面八ひをふり立て八したのほこを打ふり。討死心なりと
 おめきさけんで走りけり。まんこ是を見て。叶ふへきやうあらされは。
 うしほを結び(14オ)

手水とし。諸天にふかくきせひする。然へくは観世音。ひぐわんたが
 へ給ふな。ふいぐんちんちうねんびくわんをんりき。しゆをんしつた
 いさん。ちかひ今ならでは。しゆらがおそるゝけまんのはたを。只さ
 しかけよさしかけよと下知すれば。けまんらんぼう玉のはた。まつさ
 きにさゝせ。我おとらじとせめかゝる。まんこ兵者。かつにのつて
 おつつめ〜切たりけり。神力もつきはて。通力飛行も。叶はずし底
 のみくづと成にけり。生残るしゆら共はすみか〜にかくれたり。ま
 んこかちどき作りかけ(14ウ)

。本の舟に取乗。修羅唐人の戦に。かちぬや〜といさみをなし。唐
 土高麗走過日本近ふぞなりにける。「コトハ」去間龍王達。是をは扱
 いかゝはせんとぞせんぎせられける。其中に取てもなんだ竜王の給
 ひけるは。人間の心をたばからんには。みめよき女にしくはなし。龍
 女をもつてたばかつて此玉を取へきなり。さればにや竜宮の乙姫に。
 こひさい女と名付て。ならびなかりし美人たりしを。みめいつくしく
 かざりたて。うつほ舟に作りこめ。波の上におしあぐる。是をは知ら
 ず満戸は。順風に(15オ)

帆をあげて。心にまかせて吹せ行。「サシイロ」海まん〜として
 は又波上ちゞんたりへきてんのをきぬくかせかう〜として渡る。いつ
 れのぼくさうにかこゑ宿さん。かしらなしをう川原きどの嶋。もろみ

の島もめい嶋。薩摩の国に鬼界か嶋。「フシ同」ゆきのもとをりつしまのなる。ことゆへなく走り過。九国のちをは弓手にみて讃岐の国に聞えたる房崎の沖を通りけり。「コトハ」かゝりける処に。なかれ木一本うかべり。水主梶取是を見て。爰にきたひなる木こそ候らへ。此間の大風に(15ウ)

。沈香ばし吹れてなかるゝ哉覽と人々あやしめたりければ。まんこ聞て。何のあやしめ事そたゝ取上よと下智をする。御詮に随ひはし舟をろし取るに。沈香にてはなし。あやしやわつて見よとて。これをおつて見るに。何と詞にのべかたき。美人一人おはします。水主梶取是を見て。おのまさかりをなけ捨てあつと計申す。まんこ此由見るよりも。いかさまにも御身はてんまはじゆんのけどんにてしやうげをなさん其為な。あやしやいかにと云ければ。何ともものをは(16才)

いはずしてたゝ涙ぐみたる計也。満戸重而申けるは。いや何とだるませ給ふとも。是非に付ておぼつかなし。たゞ海底にしつめ。みくづにせよといさみをなせは。あらけなき武士。御手にすがり海にいれんとす。「サシクトキ」竜女はいとゝあくかれてあらうらめしの人の詞や。野にふし山を家とする。こらうやかんのたぐみだにも。情はあるとこそきけ。自と申は契丹国の大王の。齋の姫にてさふらふなるか。ある後のごんにより。うつほ舟に作りこめ。蒼波万里へ流さるゝ。たま

／＼きとくふしぎに(16ウ)
人輪に相たれは。さりともとこそ思ひしに。何のつみのむくみに。うき海底に沈むへき。うらめしさよとかきくどく。乱れ髪をつたひて

「フシ同」涙の露の。こぼるゝは。つらぬく。玉のことく也。霜をおびたる女郎花したばしほるゝ風情し。せいしかやさうに捨られて。ひじき物には袖しぬれ。ほす日もなしと。侘けるも今こそ思ひしられたれ。桂を書しまゆずみ。蓮をふくむ唇。百のこびますあいぎやう。なみと涙に打ぬれもの思ふ人のふぜひかや。打むつけたる。御有様よその見る(17才)

目もいたはしゝ。「コトハ」さしもにかしこきまんことは申せとも。頓てたるまかさされ。あらいたはしや。実々さぞおはすらん。それ同船申せとて。頓て舟にのする。龍じんのわさなればむかふさまに風吹。房崎の沖に十日計逗留す。さなきだに旅泊は殊に物うきに。まんこあまりにたえかねて。風の便に通ひきて。いねかりそめのうたゝねは。何となるこの音高く。世にもすゝめのすみうきに。をとるかさんかいたはしさに。「サシ」扇の風をいさめつゝ。「クリ」月てうざんにかくれぬれは。扇を揚て(17ウ)

是をたとへ。風大居にやみぬれはきおうご。かして是をおしむ。「コトハ」相見る人を恋るには。文かよはね共こふるならひ。君か心を取にくる。なふいかに／＼とをどるかす。龍女は本よりねもいらす。さりなからうたゝねいりたる風情にて。たそや夢見る折からにうつゝともなきことの葉は。「クトキ」夢のうき世のあなたれは人の詞も頼まれず。夜のまにかはる明日香川原。水ぼの淡のかりそめに。風に消ぬる言の葉の。末も通らぬ物ゆへ。あなた立ては何かせん。「フシ同」中々人には。始よりとはれぬは恨あらば(18才)

こそ 「コトハ」其上我等生れてより此かた戒文をあやまたず。むしより今に至る迄。おほくの性を受し事。或は六よく四しやうに生れ。五すい八くをうけ。或はさんづしやうにおち。しだひもつゝの火にあへり。かゝるざいごうをふり。今人間と生るゝ事も。戒力によつて。第一に殺生戒をたもつて。心の臓となる。ちうとうかいをたもつて肝の臓となる。じやいん戒をたもつて脾の臓と成。まうごかいをたもつて肺の臓と成。おんじゆかいをたもつて腎の臓と是なる。これに五音しつせいあり。いわゆる(18ウ)

宮商角徵羽双黄平盤一越是又妙のみのりとし。五智の音声是なりき。是に五の魂あり。魂魄いしんなり。此五の形をぐそくし給ふを仏と申す 「サシイロ」五のかたちかけぬればぐちあんべいのちくるいたり。いかにも仏をねかはん人は五戒をよくたもつへし。(ひとつも)戒を破なはむそくたそくの者と成て永く仏になるまし。 「コトハ」仰はおもくさふらへ共第三の戒文を。いかにとしてやぶらんと。涙ぐみたる計にて思ひ入てぞおしける。まんこも太唐そだち。仏法るふの国なればあらゝかたり(19オ)

申す。あら殊勝や。扱は後生の御為にきんかいをたもたせ給ふか。其戒文の中に。六はらみつの行有。其中にとつても。にんにくはらみつとは人の心をやぶらす。いかに五戒をたもちても。人の心をやぶりなは。仏にはなりがたし。されはにや仏には。三みやう六つうまします。是は偏に過去にしてしよはらみつを行ぜし其とく今にあらはれて仏と成給へり 「カ、ルフシ」縦一度は瀧の水 「同」にこりてすまぬ物

なりと。終には澄て清からん。恋には人の死ぬか。扱もむなしく恋死なは一念五百生。けん(19ウ)

ねん無量功。生々の間に。つきせぬ恨のふかふして。ともに邪姪となるならば。仏にはならずして邪道に永く落へし 「片ツメ」戒のしなあまたあり五戒をよくたもつては。人間と生れて。五体を受るなり。十戒をたもつては。天人と生れて。五すいを受る也二百五十戒は又。しやうもんと生れて。仏にはなり難し。五百戒をたもつては。多んがくと是なる是も仏にえならず。ぼさつさんじゆ一心戒此戒をたもつては頓て菩薩と成つゝ。仏と更に成難し大乘円頓戒。(此かいを)をたもつては頓て仏に成なり(20オ)

。大乘の戒形は二念をつがぬ戒なり。しんたいはむさうにてがしんもとよりじくうなり。生死にもつなかれすねはんにさらにぢうせす邪正すなはちきよければ。すゝぐべきあかもなし。いとふべきぼんなふなし。ねかひてきたる仏なし。見る一げんを仏とし。聞事を御法とす。こゝを知らぬをまよひとす。陰陽(二つ)和合の道。いもせうふ(へふうふ)のなからへ。是仏法のみなもと。おろかに思ふ(ヒビ)からず。おなびきあれやとぞ思ふいかに(と)申けり 「コトハ」龍女聞し召れて。それは発心の御法とし。仏法にをゐても(20ウ)

。秘蔵の所なれ共。ねかふ事なくしては仏には成かたし上代はきもじやうこんにして。ちども大智恵成へし末世の今はげこんにてち多有人もすくなし 「サシ」むかし上代の大ち多の人たにも家を出て妻子を捨。ほうの為に難行す。七達太子は高位なる。繁昌の位をふり捨。わ

りなく契り深かりし。やしゆたらによをよそに見。十九にて出家をとげ。檀徳仙のほうらいあらゝ仙人を師と頼み。鷲のお山の礼法に。薪をこり身をこがし。せんこくにむすぶあかの水。氷の隙を(21才)

汲たびに涙は袖のつらゝとなるよるは又夜もすから。せにんのゆかの上にし。座禅のとこのふとんと。「フシ同」なりかゝるしんくのこうをつみ。まさしく釈迦となり給ひ。三界の独尊。ししやうのゑことましゝゝて。一代しやうげうを。説ひろめ給ふなり。爰をもつて案するに。煩惱則菩提心。生死即ねはんとて。妻子をたいしさふらひて。仏とやすく成ならはなとや太子釈尊は。王の位を。ふり捨て后をいとひ給ひけん。其外小ぐわのらかんたちいつれか妻子を対して。仏となりし(21ウ)

人やある。扱も仏の御弟。なんだ太子と申せしは。しゆきぼんのうつきずして。女人を対し給ひしを。かくては仏にならじとて。仏方便めくらしして。浄土地獄のありさまを。そくしんに見せ奉り終に出家をとげさせてなんだびくとぞなし給ふ。「片ツメ」いとゝ好む邪行を。よしとをしへ給ふは。盲目にあしき道をしゆる風情成へし。か様に申せはとて。本より我は。仏にて有なり。こくう一生同一躰。頭は薬師耳鼻は阿弥陀。胸はみろく腹は釈迦腰は大日如来なり其外十方の諸仏達(22才)

。もろゝのぼさつとし。わが躰にくそくし。十方のこくうに。ほうによとして。おはしますきたりもせず。去もせずいつもたえせずましますを発心仏と申す。形を作りあらはし。浄土を立て。すみかをし給

ふを法心仏と申なり。八相成道し給ひて。のりを説則衆生をりやくし給ふをおうじん仏と申也。三じんの取わき。一しんの信ずるはさとりのまへの仏也。三じん一そくと観じつゝ。何(レ)をも信ずるをさとりの前と申す。仏とならん其為。難行苦行せんもの。いかで善悪乱るへき身(22ウ)

はいたつらになさるゝと叶ふましとそ仰ける。「コトハ」去間まんこはことのほかに腹をたて。いかにやいかに聞し召せ。仏をねかふ人は皆。道とち多とじひしん。一つかけては成かたし。道といつは行たい。智恵といつはさとりのしん。じひといつは一切の衆生をふかくあはれみて人の心にしたがへり。第一慈悲のかけては。仏とさらになり難し。所詮ものを申せはこそ。ことばも多くつくれ。今は物をは申すまい。かくてひれふし思ひ死となつて。此世の契りこそ浅くとも。地獄餓鬼畜生。修羅にんでんに。むまれ(23才)

かはり死にかはり。六道ししやうの其内を。くるりゝと追めぐつて。うさもつらさも後の世に。思ひしらせ申さんとて其後物を申さず。竜女は本よりもか様にめされんため。たばかりすまし給ひて。玉をのへたる御手にて。満戸か袂をひかへさせ給ひ。いたふなうらみさせ給ひそ。心さしのましまさは。自か志望をかなへてたべ。草の枕のうたゝねの。露の情は夢計契りなん。まんこ余りの嬉しきに。かつはと起てみをいだし。まことにて御座さぶらふか。二つとなき命をも参らせんと申す(23ウ)

。龍女聞し召れて。いやそれまでもさぶらはす。実哉覽しやくせん

んのみそぎにて。五寸の釈迦のれいぶつ。ましますよしを。舟内にて聞参らせてさふらへは。其玉を一夜自に預させ給へ。ともかくも仰にしたかふへし。まんこ聞て。あらしやうたいなや。自余の所望かところ思ひて有に此水晶の玉にをみては。中々思ひもよらぬ事成へしとふつと思ひきりけるが。何程の事の有へきと思ひなをし。扱も御身は。何として御存知さふらひたるそ。やさしくも御所望候(24才)

物哉さらはそつとおかませ申さんとて。くろがねじやうをさし。印判をもつて封じたる石の「ツメ」からうとの中よりも水晶の玉を取出し龍女の方へわたす。傾城と書て。みやこかたむくとよまれしもいまこそ思ひしられたれ。かくてしうあひれんぼの。わりなき契りと見えつるか三日も過ぎるにかきけすやうにうせぬ。玉はと人に見せければ取て失ぬと申す。「サシイロ」唯亡然と。あきれはて。こくうにてこそ。たんだくすれ。「コトハ」あら口惜や。竜宮の都より。たばかりけるを(24ウ)

しらすして。とかう申に及はずと。残る宝を先とし。急都に上り。さま／＼のほうぶつこと／＼ぐとり出し太織官に参らせ上る太織官御覽してをくり文の其中に第一の宝物。水晶の玉の見えぬは。いかにと尋給ふ。つゝむへきにあらずありのまゝに申す。鎌足聞し召れて。余り思へは無念なるに。我をぐそくし其浦の有さまを。見せよと仰ければ。承ると申してもとりの舟にのせ申房崎の沖へおし出して爰なりと申すたゞばう／＼としたりし波の上を御覽して(25才)

むなしくもとり給ふ。「サシイロ」道すから思し召すさもあれ無念なる物かな三国一の重宝を我朝のたからになさずして徒に龍宮の宝となしけん口惜さよ。「コトハ」能々物を案するに。竜宮界は六道にをゐても畜生道の内人間の智慧にははるかにおとるべきものを。さあらんときは何としてたばかられけんふしぎさよ。「イロ」我又せんけうはうへんしいかにもあんをめぐらし。「片ツメ」この玉ををいてはとらふず物とおほしめし都に帰り給ひて朝夕案をめぐらし。玉を取へき計(25ウ)

略。くふうまし／＼けれども。さすか海中へだつて。たしゆえんたうならされは舟のかいぢあらはこそ。然りとは申せ共。じんそくにをみてをや。だいせ太子は忝。如意の玉をとらんとて。えいじの貝をもつて。きよかいははかりつくしつゝ終にほうじゆえ給へり。大ぐわんとしては又。つゐにむなしき事あらし。我もちかひてねがはくは。生々世々の間に此玉ををいては。とらふずものとおほしめし。都の内を忍ひ出かたちをやつし給ひ。又房崎へ下らるゝ。「コトハ」彼うらに着せたまひ(26才)

。浦のけしきを見給ふに。海士人多くおりひたり。かづきする事おびたゞし。かの海士の中に。としのよはひはたち計に見え。みめかたち尋常なるか。ろすいにむつれてあそふ事たゞ平路をつたふごとし。かまたり見こめ給ひ。かのあまのとまやに宿をかり。日数ををくらせ給ひけるに。あまにもいまだ妻もなし。「サシ」鎌足旅のひとりねとこそさひしき事なれば。こゝにて日をやかさねけん。ねがたけれ共姫

松の。はやうら風に打なびく。なに(26ウ)

はもつらきうらなからそよ。よしあしと云かたりて。ふたりあれはぞなくさみぬ 「フシ同」うきねのこの梶まくら。波のよるにもなり

ゆけは。ともゝなぎさの小夜衛。吹しほりたる。うら風にこゑを。くらぶるなみの音。洲崎の松に驚あれは。梢を波のこゆるに似てしほやの煙一むすひ。すゑは霞に消匂ひ。夢路ににたる。うたかたの。なみのこし舟かすかにてからろの音の遠ければ花になくねのかりかねか。

我もみやこの恋しさにこゑをくらべてなく計(27オ)

うき身ながらもまきの戸をあけぬくれぬと過行は三とせになるは程もなし 「コトハ」かくて男女のなからへ。わりなき中の御契りに。若

君出来給ふ。今はたかひに何事をも打とけたりし風情なり。かまたり仰けるやうは。今は何をかつゝむへき。我こそ其名かくれもなき。太

織官とは我が事なり。心ふかきのぞみのありて。此ほと是に有つるそ。

然るへくは所望をかなへてたびてんや 「サシクトキ」海士人承なふ

こはまことにて御座さふらふか。あらはつかしや四(27ウ)

海に御名かくれもなき。かゝる貴人にしたしみ申ける事よ。ひとつは冥加尽ぬへし。ひとつははく女げせんにて。はだへは波のあら磯。た

ちるはいそのなかれ木。こゑはあらいそに。くだくるうつせ波の音

「フシ同」髪はやしほに引みだすつくものことくなる身にて。みやこの雲の上人に。おきふしひとつとこにして見ゝぬるこそはつかしけれしかしたゝ。身をなげてしなんとこそはくときけれ 「コトハ」かまたり聞し召れて。あらやさしの申事や。とて(28オ)

も死せん命を。わがためにあたへ。龍宮界へわけ入たつぬる玉のあり

所。見てかへれとの御説也。海士人承り。龍宮かひとやらんは。ありとは聞いていまた見す。行てかへらん事かたし。たとひいかなる仰なり

とも。何かはそむき申へきと。かまたりにおいとま申。一ようの舟にさほをさし。沖をさして漕出波間を分てつつと入。一日にもあからず二日にもあからず 「サシイロ」三日四日もはや過て七日にこそなりにけれ 「コトハ」かまたり仰けるやうは。あらむざんや今は(28ウ)

はや。底のうほのゑじきともなりぬるか。あやしやいかにおほつけなしと。心をつくさせ給ふ処に。よみかへりたるふぜひにて。もとの舟

にそあかりける。いかにとはせ給へは。しはしはものを申さす。やゝありて申けるは。此地よりも。龍宮界へ行道は。事もなゝめの事

ならず。一つのかしらをさきにして。くらき所をまぼつて。ちいろのそこへ分入に。うしほのろすいのつきぬれは。くれなゐの水あり。な

をし底へ分入に。金のはまにおちつく。五しきの蓮花おい(29オ)

ふし。青きくちなわ多くして。れんげのこしをまとへり。なをしさき

を見渡すに。れいが清くなかれ出る。水の色は五しきにて。さうがん

高くそばだてり。川にひとつの橋あり。しつほうをちりばめ。玉のたほこたてならべ。風にまかせてへうようす。かの橋をわたるに。足

すさまじくきもきえ 「ツメ」夢うつゝともわかまへす。なをしさき

を見わたすに。ろうもん雲にさしはさみ。玉のまくさはかすみの内。こかねのかはら日(29ウ)

光り。さうでん迄もかゝやけり。三ぢうのくわいらうに。四しゆの門をたてたるひとつの内裏おはします。龍宮城是なりけり。べいるりの柱をたて。めなふのゆきげたに。はりのかべをいれにけり。四しゆのまんじゆのやうらく。玉の簾をかけならべ。帳にはあやをかけつゝ。とこに錦のしとねをしき。ちんだんをまじへ。なをらんけいをみがきたつ。かゝるめてたきさうたに。しやかつだ龍王初とし。わしゆきつ竜王に至る迄。法座をかざりざせらるゝ(30才)

もろくの。小龍毒龍。金の鎧甲をきて。四の門をまほれり。さても尋る玉をは。別にでんをつくつて。たからのはたをたてならべ香をもり花をつみ二六時中に番をもり。いねうかつがう中々に申すにをよばさりけり。八人のりうわう時々刻々にしゆごすれば。此玉をとらん事。今生にては叶ふましましてみらひに取かたし。思しめし切給へ。我か君とこそ申けれ 「コトハ」かまたり聞し召れて。あら嬉しや。扱は玉の有所をは(30ウ)

たしかに見つるものかな。ありとたにもおもひなは。とりゑん事は治定なり。龍王共も其間はかりことをめぐらし。たばかつてとりたれば。我もたくみをめくらし。たばかつて取へきなり 「サシイロ」それ龍王は。五すい三ねつ隙もなく。くるしみ多き御身なり。此くるしみをまぬかるゝ事は。しらべの音によもしかし 「コトハ」爰をもつて案するに。龍王は舞と官絃にてたばかるへし。此海のおもてに。極楽浄土をまなぶべし玉のはたほこ。百(31才)

ながれ立ならべ。扱又がくやをかざらせ。ひだり右のがくやに。けん

くわんをしらべすまし。そのみぎんに。みめよきぢよをそるへ。をんかくをそうするものならば。たゝ天人に似たるへし。さあらん程に大僧正からりんを打ならし。上天下界の龍神を。くわんしやうするならば。すゝめによつて神仏。のぞみらいりんましますは。龍宮の都より。八大龍王さきとして。もろくのけんそくを。引ぐして出らるへし。其間は竜宮界には。りうひとつも(31ウ)

有ましきそ。留守のまをうかかつて。そろりといつてぬすみとつたべかしとこそおほせけれ 「サシクトキ」海士人承りあらゆゝしの君の御たくみやさぶらふ。かゝるぜんげうなくしていかてたやすくとりゑなん。但留守の間なりとも。玉のけいごは有へし。たとひむなしくなるとも。玉ををてはしさいなく。とり上君に参らすへきか。もしもむなしくなるならば。またたらちおのみどり子の。ちふさを。はなるゝ事もなし。君ならては後(32才)

の世を。あはれむ人のあるへきかとして。なくより外の。事はなし 「コトハ」かまたり仰けるやうは。こゝろやすくおもへ。もしもむなしくなるならば。けうやうのために。奈良のみやこに。大がらんを建立すへし此若子にをみては。いまだようちなりとも。みやこへぐしてのぼり。天下の御目かけ房崎の大臣と号し。藤原のとうりやうたるへきよし。御物かたりありければ。あま人承り。よろこぶ事はかきりなし。(やかて)都へ使者をたて。舞のしをめし(32ウ)

下し。あたりのうらの舟をよせ。しゆたんをもつて色どれる。舞台をこそははりたてける。十丈のはたほこ。百なかれたてならべ。風にま

かせてひるがへせは蒼海はやかて浄土となる。ひだり右のがくやに
ざりたてたる大たいこ。幔幕をひかせ。しゆれんに玉のすだれをかけ
法座を左右にかざらせて。うげんちとくの大僧正からりんを打ならし

〔ツメ同〕 上天下界の龍神を。おとろかししやうずれば。八大龍王
しゆらいして。せんぎまち (33オ)

まちなりけり。なんせんぶしう。房崎の沖にして。法座をかざりてう
しやうあり。いざやらいりんやうがうあつて。ちやうもんせんと。せ
んぎしてそこはくのけんぞく共を引ぐしてこそ出られけれ。すでに龍
神出給へは。こくちうの児達。身をかざりまふけ。爰をせんど舞給
ふ。たゝ天人のことくなり。さるほとに竜神五すい三ねつたちまちま
ぬかれ給ひける間。何事も打忘舞に見とれ給ひて。房崎に日をそをく
ら (33ウ)

るゝ〔コトハ〕あはや隙こそよけれど。海士人でたちをかまへた
り。五しきの綾をもつて身をまとひ。やくわうの玉をひたひにあて。
かねよき刀わきばさみ。布綱のはしをこしに付なみまをわけてつと
いる。たとひ男子の身なりとも。一人うみへいらん事は。毒のうほ。
龍龜大じやのをそれもあるへきに。申さんや女の身と有て。一人海へ
入事はたくみすくなき心かな。数千万里のかいろを過。龍宮の都に着
にけり。見 (34オ)

をきたりし事なればまよふへきにてさふらはす。りうぐうの法殿にあ
がめをく。水晶の玉を。おもひのまゝにぬすみとつて。腰に付たる約
束の。布繩をうごかせは。船中の人々。あわ約束こゝなりとてんでに

つなを引にけり。あまはいさみてかづけは。上よりいと引上る。今
はかうと思ふところに。玉をまぼる小龍王。あとをもとめて追事は。
たゝみつばのそやをいるごとく。すではや此つなのこりすくなく見
えし時。船中の人々あはや (34ウ)

ほのかにみゆるは〔片ツメ〕取上よと下知するに。海士の跡に付て。
一の大蛇進てくる。長さは十丈計にてひれに釵をはさみたて。眼は
たゝ夕日の。水にうつるふ如くなり。紅のことくなる。舌のさきをふ
り立。すきまなくおつかくる。海士叶はしと。思ひける間刀をぬいて
ふせきけり。船中の人々。此由を御覽じ。手をあがきみをいだきおつ
つふいつころんづ。あはやくと仰けり。かまたり御らんして御釵を
ぬきようしのととき狐のあたへたびたる。一の鎌に取そへ。とんで (35
オ)

いらんとし給ふを。船中の人々。弓手馬手にすがつて。こはいかにと
とゝめけり。すではや此繩。残りすくなく見えし時。大じや走り
かゝつて。情なくも彼あまの足をけちぎれば。水のあわとそきえにけ
る〔サシクトキ〕むなしき死骸を取上諸人の中に是を置一度にわつ
とさけぶ。鎌足御覽して玉は取えぬもの故に二世のきえんは尽はてぬ
胸の間に疵あり。大蛇のさけるのみならずと。あやしめ御覽有ければ
此疵の中よりも水晶の玉出させ給ふ。大蛇の追かけし時。刀 (35ウ)
をふると見えしは。ふせかん為になくし。玉をかかさん其為に。我身
をかいしけるかとよ。せめて此疵をわがみ少おいたらは。か程にもの
は〔フシ同〕思ふましきを女ははかなき有様かな。おつとのめいを。

ちがへじとて命を捨るはかなきよ。灯に消る。よるの虫は妻故望へそのみまをこがすなり。笛による秋の鹿ははかなき契りに命を失なふ。それは皆々。しうあひ恋慕のわりなき。契りとは云ながら。懸る哀はまれ成へし。我には二世のきえんなれば。又こんよにも相みなん。汝は今こそかきりなれ。別の姿を(36才)

能みよとて。いとけなき若君を。死骸におし添たりければ。死たる親と。知らぬ子の此程母にはなれつ。たまにあふたる嬉しさに。むなしきちぶさをふくみつ。母の胸をたたくをみて。上下万民おしなへて皆。涙をそ。なかしける。「ツメ」海士はむなく成たれと。かしこきせんげう。方便によつて。竜宮界へうばはれしむげ宝珠をことゆへなく。うばい返し給ふ事。有難しとも中々に申に及ばざりけり。此玉は則送り文にまかせ興福寺の本尊。釈迦仏のみけんに。えりはめ給ひけるとかや。正(36ウ)

身のれいざう。しやくせんだんのみそぎにて五寸のしやかを作り立にくしきの御舍利。御しんにつくりこめながら。はう八寸の水晶の。塔たうの中に納て。むげ宝珠と名付て。三國一の重宝龍王のおしみ給ひし。

こ
とはりとこそ聞えけれ(37才)

付記

名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」の翻刻は前回の(八)で終わっているつもりでした。しかし後になって「大織冠(太織冠)」が残っていることに

気づきました。これは(五)の最後に入れるはずでしたが、分量が多くなり、次回に回したのでした。ところが(六)の時にそれを忘れて、「元服曾我」からはじめてしまいました。私の思いこみのため、間違いを犯し、蓬左文庫をはじめみなさまにご迷惑をおかけしましたこと、お詫び申し上げます。なお、今回は【校異】がありません。本学も独立行政法人となり、これまでのように研究紀要を出す予算がなくなりました。発行回数も頁数もきびしく制限されることになりました。この「翻刻」では本文のみで頁数が制限に達してしまいましたので、【校異】は割愛いたしました。